airiti

關於語態的語法範疇探討
—針對主動語態和被動語態之外的區域—

落合由治

淡江大學日文系教授

摘要

在這篇論文中，我們重新構建了與語態相關的語法範疇，並研究了現在被提出作為被遺忘的中間語態的概念。在本論文中，作為社會類型的文本來看一個案例研究，我們選擇了一種小說，其主動和被動之間的關係是清晰的，並且使用了與語態相關的各種表達。然後，我們探討了與語態相關的句子模式及詞彙的實際狀態。 最後，我們提出了審查與語態相關的語法範疇的基本條件，並探討了簡化語法範疇對日語教育的適用性。

關鍵字： 語態、中間語態、案例研究、語法範疇、日語教育

airiti

A consideration of grammatical categories on Voice: Aiming at areas beyond active and passive

Ochiai Yuji

Professor, Tamkang university, Taiwan

Abstract

In this thesis, we have reconstructed the grammatical categories related to the Voice and have examined the concept of middle voice that is now being raised as a forgotten Voice. In this thesis, as a text with a social genre actually as a case study, we have picked up a novel whose relationship between the Active and Passive is clear and various expressions related to the Voice are used. Then, we have examined the vocabulary and the actual state of the sentence pattern related to the Voice. Finally, we have presented basic conditions for reviewing the grammatical categories related to the Voice and have explored the applicability of the simplified grammar category to Japanese language education.

Keywords: Voice, middle voice, case study, grammatical categories, Japanese language education

airiti

態に関する文法カテゴリーの考察
―能動態と受動態を超える領域を目指して―

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

要旨

本論文では、態（ヴォイス）に関する文法カテゴリーを再構成する意味で、現在、忘れられた態として再提起されている中動態の概念を検討し、事例研究として実際に社会的ジャンルを持った文章として、動作主と被動作主の関係が明確で、しかも態に関する多様な表現が使われている小説を取り上げて、態に関わる語彙と文型の実態を考察することとしたい。最後に、態に関わる文法カテゴリーを見直すための基本的条件を提示して、より簡明化された文法カテゴリーの日本語教育への応用可能性を探りたい。

キーワード：態、中動態、事例研究、文法カテゴリー、日本語教育

airiti

態に関する文法カテゴリーの考察
――能動態と受動態を超える領域を目指して――

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

日本語に関する現在までの研究は、明治時代に近代的基礎が造られてから現在に到るまでほぼ同じパラダイムで展開してきた。その中で日本語研究では由来の異なる概念が同時に存在する事態が常態化し、現在もそうした状態が続いている。[1]文法の基本的カテゴリーに関しても同様で、欧米語文法ではヴォイス（Voice、態）と呼ばれる能動態と受動態に関する動詞語彙と文型に関する問題がそのまま日本語研究でも踏襲されると同時に、歴史的観点からの古典日本語文法での相（受身、自発、可能、尊敬の用法）の問題も日本語のヴォイス（Voice）の領域で考察されている。さらに、動作主と被動作主との関係からテンス、アスペクトに関する各種の動詞語彙と文型（～てしまう、～てある、～ておく、～てもらう、～てくる、～ていく等)の問題と動詞の基本的類型に関わって存在に関する表現(～がある、～がいる等）も関係した問題の領域として扱われるようになっている。[2]これが単に限定された研究者間の問題で止まっていれ

---

[1] 例として日本語学会の学界展望をみると、非常に多くの由来のことなる概念が同時並行的に使われている状態がよく分かる。野田春美（2012)「文法（理論・現代)」「<特集>2010 年・2011 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』8-3 日本語学会、前田直子（2014)「文法（理論・現代)」「<特集>2012 年・2013 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』10-3 日本語学会、八亀裕美(2016)「文法（理論・現代)」「特集 2014 年・2015 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』12-3 の文法関係研究の対象分類を参照。

[2] 日本語のヴォイスが持つ対象領域の広さについては、すでに多くの論者が指摘している。一例として日本語文法学会(2005)「特集 ヴォイスの射程と本質」『日本語文法』5-2pp.3-56、益岡隆志（2007)「ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティとその連関」『第九回フランス日本語教育シンポジウム』http://aejf.asso.fr/files/symposium_actes/2007_actes/2007P17Masuoka.pdf、林青樺（2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方との関わりから』くろしお出版、宮腰幸一（2014)「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造:予備的考察」『論叢:現代語・現代文化』12pp.1-85 参照。

ば大きな社会的影響はないであろうが、深刻な影響として、こうした文法範疇や概念の共在並立が、こうした用語を使って日本語を教えている日本語教育現場や日本語教師養成にも大きな混乱をもたらす結果になっていることは避けて通ることができない問題と言える。

元々、起源の異なる課題から生まれた様々なカテゴリーや概念が現代では元の範疇を乗り越えて一つの関係領域で共在するようになっており、日本語でのヴォイス、テンス、アスペクトあるいは態、相、動詞に関わる分類の領域の基本的問題は、それらの多様な問題を発生させているより根源的な原理の問題として再考されるべき時期に来ていると言えよう。

本論文では、態に関する文法カテゴリーを再構成する意味で、現在、忘れられた態として再提起されている中動態の概念を検討し、事例研究として実際に社会的ジャンルを持った文章として、動作主と被動作主の関係が明確で、しかも態に関する多様な表現が使われている小説を取り上げて、態に関わる語彙と文型の実態を考察することとしたい。最後に、態に関わる文法カテゴリーを見直すための基本的条件を提示して、より簡明化された文法カテゴリーの日本語教育への応用可能性を探りたい。

2. 態に関する研究動向における「中動態」概念の再提起

文法カテゴリーを再検討する場合、日本語研究では由来の異なる範疇や概念が同時並行的にある事象に用いられることで、志向されている言語現象自体が隠されてしまうという問題が生じている。態に関する問題群も、その一つである。

2.1 態に関する対象領域と課題

釘貫亮（2008）は、古代日本語での態の成立を考察して、以下のように述べている。

> 西洋諸語の受動態は、能動態と文法的対応関係を有する。これに対して日本語の受身は、「非受身」つまり能動態とは対応していない。日本語の受身形式レル・ラレルは、使役と呼ばれる

文法範疇と意味的にも形態的（セル・サセル）にも対応すると考えられる。ここで注目されるのは、日本語の受身と使役の対立の間に介入しているのが、自動詞と他動詞の対応関係である。[3]

そして、現在のような国語学で「非情の受身」と呼ばれた日本語での能動態と対応する受動態の文（「この寺は〇〇時代に建てられた」）や名詞修飾節の表現形式（「〇〇時代に建てられた寺」）の成立は明治 30 年以降の欧文翻訳の影響による近代文章語の成立からであると述べている。現代でもこうした見解を主張する研究者は少なくない。[4]しかし、金水敏（1991）は、明治 30 年以降の成立とされる「非情の受身」は、平安時代からすでに受動文として、「リ・タリ」を用いた形式で使われ、名詞修飾節の用法としても普通に用例が見られ、明治時代にその用法がより多くの名詞を主語にできる形で拡大したと述べており、日本語には日本語としての態の用法がすでにあったことを示唆している。[5]

現在の日本語学は、基本的に明治時代後半に成立した近代語を元に態の問題を扱っているため、非常に多くの論が出されていても元々、江戸時代までの日本語で、現代語では能動態と対応する受動態とされる「受身」、古典語では「受身」と同じ語形を持っている「使

---

[3] 釘貫亮（2008）「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」『第 8 回国際研究集会報告書「日本語テクストの歴史的軌跡 解釈・再コンテクスト化・布置」』p. 3。

[4] 近代以降の日本語ヴォイスの研究の中で最も早く注目されたのは、「受身」に関する問題で、三矢重松（1908）『高等日本文法』明治書院と言われている。三矢重松（1908）は、「非情の受身」として「コロンブスに発見せられたる亜米利加」などの例を挙げている。以後、こうした表現は明治期以降の欧米文の翻訳によって出現したものとされるようになり、山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館、松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店、橋本進吉（1931）「助動詞の研究」『助詞・助動詞の研究』岩波書店などの「非情の受身・非固有説」が通説として広がることになった。

[5] 金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164 集参照。原田信一（1974）「中古語受身文についての一考察」『季刊文学・語学』74pp. 44-52、小杉商一（1979）「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社 pp. 473-488 が、古典語での「ル、ラル」の用法について「非情の受身」の例が少なくないことを指摘した。また、日本語での「受身」などに関わる表現の研究史と語形の用法、変遷については川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版にまとめられている。

役」「自発」「可能」、自他動詞などの文法概念が実際の文章中での用法として、どのように位置づけられるのかという文法史的表現史的変遷の観点が抜け落ちてしまっている論が大半である。そのため、日本語での態に関わる表現とは、実際に使用される場面では元々どんな機能を持った文法範疇なのかという観点を持つことができなくなってしまっていると言える。[6]

2.2 中動態の概念の再提起

現代日本語の態に関する研究の元になっている西洋語でも「態」は問題の多い概念で、古代ギリシア語やサンスクリット語など印欧語の元型に近いとされている古代語に見られる能動、中動、受動の三つ態のうち、中動態とは何かが理解できない状態が続いていた。また、その後の各国語の成立の中で能動と受動だけになった文法構造変化についても、理由はよく分からなかった。中動態の再考が行われるようになったのは、現代になってからである。現象学の視点から芸術創作と受容を考察している森田亜紀（2013）は、メルロ＝ポンティの一連の人間の知覚に関する現象学的考察で日本語の「見える」に該当する動詞形をメルロ＝ポンティが使用するようになったことをバンヴェニストの中動態と結びつけて、芸術創作と受容に

---

[6] 現在の日本語学では、金田一春彦（1957)「時・態・相および法」『日本文法講座１　総論』明治書院が欧米の言語学でのテンス、ヴォイス、アスペクトおよびムードの概念を日本語学に取り入れる必要性を説いている。以降は、国語学の範囲での「受身」「使役」等の考察が中心であったが、現代の日本語学でのヴォイスの研究の枠組みは、寺村秀夫（1982)『日本語シンタクスと意味Ｉ』くろしお出版の「受動」「可能」「自発」「使役」という文法的態と自動詞・他動詞の対立による語彙的態の二種類の態があるという説が出されてからである。以降はこのフレームを継承し、多くの論が出されている。代表的な論として益岡隆志（1987)『命題の文法―日本語文法序説』くろしお出版は、単純述語を取る述語と格表現を持つ文の場合を無標態（能動態）とし、それと対応する複雑述語を取る述語と格表現を持つ文の場合を有標態として、有標態を「受動（られる）」「使役（させる）」の一次的有標態と「可能（られる・える）」「願望（たい）」「難易（やすい・にくい）」「現様（がる）」の二次的有標態と、さらに態に含まれる表現を拡大して捉えている。また、仁田義雄編（1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版は、寺村秀夫以後の、形態的な態と意味的な態という点からの各研究者の論説をまとめている。いずれも作例での整理、考察であり、その傾向は現代でも態をめぐる問題では広く踏襲されている。現代日本語のヴォイスに関する先行研究のまとめは、林青樺（2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方との関わり方』くろしお出版に国語学系統と西洋の言語学系統のそれぞれの日本での研究の流れが整理されている。

airiti

おける身体性や知覚と言語表現としての中動態との密接な関係を哲学の面から捉えようとしている。[7]同じく、日本語への中動態概念導入の必要性を提起している國分功一郎（2017）は、フランスの一般言語学者バンヴェニストの論を元にして、動詞にはもとは主体の意思を問題にする能動、受動の区別はなく、出来事だけを述べる非人称の中動態から自動詞が生まれ、その中から主体の意思を示す他動詞と能動態が生まれ、次第に能動と対応する受動の形式が中動の用法を覆うようになり、中動が概念として分からなくなっていったと捉えている。[8]さらに國分功一郎（2017）は、中動態について 20 世紀の前半にすでに考察していた細江逸記（1928）の論の発見を紹介し、細江の論を元にして日本語においても上代語の時代には「見ゆ」「聞こゆ」など「ユ・ラユ」の用法は中動態であり、中動態が元になって平安時代以後の中古語での「ル・ラル」に変化し、「受身」「自発」「可能」「尊敬」の助動詞となり、自動詞の発達と他動詞の派生を促したと捉えている。[9]

2.3 態に関する研究の再構成

態に関する考察は非常に多岐に渡るが、今後の研究方向を考えたとき以下のように基本的な問題点を整理できるであろう。

（1）現代語での態に関わる問題とされてきた、態の分類、能動と受動、使役との関係、自動詞と他動詞の類別、その他関連する可能形、アスペクト形、「ある」「いる」「する」「なる」等の関連する動詞の研究は、歴史的な日本語の文法カテゴリーと語彙の変遷と関係づけて考察する必要がある。現代語だけをいく

---

[7] 森田亜紀（2013）『芸術の中動態』萌書房参照。論の元になっている著作はモーリス・メルロ＝ポンティ／滝浦静雄・木田元訳（1964）『行動の構造』みすず書房、モーリス・メルロ＝ポンティ／竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房等を参照。

[8] 國分功一郎（2017）『中動態の世界―意思と責任の考古学』医学書院第 2-4 章参照。論の元になっている中動態の考察は、エミール・バンヴェニスト（1983）『一般言語学』みすず書房を参照。

[9] 同上注。第 6 章参照。日本語での中動態の先駆的考察は細江逸記（1928）「我が国語の動詞の相(Voice)を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』。

ら作例や置換で考察しても、日本語の文法的カテゴリーの歴史的変化や用法の変化発展から見ると有効な整理や理解は非常に難しい。

（2）明治期以降に西欧語研究の影響で産まれた「非情の受身」外来説等の「受身」に関する近代以降の論点、それに関係した自他動詞の分類等は、歴史敵資料による検証では証明が難しく、白紙に戻して考察するほうが、態全体の問題を捉える場合は有効である。古典語での「受身」に関する問題は、中古語の「ル・ラル」、上代語での「ユ・ラユ」および自動詞他動詞の成立、さらに能動と受動成立以前の中動態を想定して、起源を遡りながら、文法カテゴリーの成立、分化、変遷をたどる必要がある。

（3）態の問題は、中動態の再提起から見ると言語主体と世界との対応関係から来ていると見られ、そこでは近代的な能動と受動という主体の意思による世界解釈のフレームを前提にしないで、その基底に身体的で無意思的な意識の世界への態様を想定する必要がある。態は単に言語形式の問題ではなく、言語主体が世界をどう捉え、どう関わるかを決めている意識と世界の態様構造を示している可能性が考えられる。

態の問題について、今までのように多様な形式と意味にまたがって漠然とした範囲で論じたり、言語形式を中心に語彙のみ、文のみを取り上げて検討しやりしても態の持つ基本的な性質は理解しがたいと言える。その形式が使われている表現、ジャンルに即して態に関する問題を再考察する必要があると言えよう。

そこで本論文では、西洋語の影響を受けて近世語が近代語に変化した明治時代後半の小説作品を資料にして、態に関する言語形式の用法を整理することで、言語主体が世界をどう捉え、どう関わるかを決めている意識と世界の態様構造を捉える試みをおこなってみたい。

airiti

3.明治後期の小説作品における態に関わる言語形式

以下では、具体的な社会的言語表現ジャンルの中で言語主体と世界との関係が端的に表現されている表現ジャンルとして、近代小説を選び、態に関わる表現がどのように使われているかを事例研究の方法で見ていきたい。検討する言語形式は、自他の描き方に関わる文末と文中の表現である。取り上げる作品は、作中で三人称の登場者により話の筋を進めている明治 40 年代の小説として泉鏡花「婦系図」(明治 41・1908 年)、夏目漱石「門」(明治 43・1910 年)を取り上げ明治時代後期に文章表現上、態と関わって自他の描き方がどのように変化しているかを見ることにする。

3.1 明治 40 年代「婦系図」における自他の描き方に関わる表現

以下では、まず「婦系図」第一節を取り上げて、自他の描き方に関わる文末と文中の表現を見ていきたい。なお、丸数字は文番号である。「婦系図」の場合、文や段落の意識は現代と異なっているので、段落番号は付けない。枠囲いは登場者あるいは焦点化の対象で、点線はお蔦に属する表現、二重線部はお蔦の動きに属する表現、下線部はその他の登場者に属する表現、波線部は人物以外の登場者に属する表現である。

例 1「婦系図」一

①素顔に口紅で美いから、その色に紛うけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。②お蔦は、皓歯に酸漿を含んでいる。……

③「早瀬の細君はちょうど(二十)と見えるが三だとサ、その年紀で酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、」と四辺近所は官員の多い、屋敷町の夫人連が風説をする。

④すでに昨夜も、神楽坂の縁日に、桜草を買ったついでに、可いのを撰って、昼夜帯の間に挟んで帰った酸漿を、隣家の娘――女学生に、一ツ上げましょう、と言って、そんな野蛮なものは要らないわ！　と刎ねられて、利いた風な、と口惜がった。

⑤面当てというでもあるまい。⑥あたかもその隣家の娘の居

airiti

間と、垣一ツ隔てたこの台所、腰障子の際に、懐手で佇んで、何だか所在なさそうに、しきりに酸漿を鳴らしていたが、ふと銀杏返しのほつれた鬢を傾けて、目をぱっちりと開けて何かを聞澄ますようにした。

⑦コロコロコロコロ、クウクウコロコロと声がする。⑧唇の鳴るのに連れて。

⑨ちょいと吹留むと、今は寂寞として、その声が止まって、ぼッと腰障子へ暖う春の日は当るが、軒を伝う猫も居らず、雀の影もささぬ。

⑩鼠かと思ったそうで、斜に棚の上を見遣ったが、鍋も重箱もかたりとも云わず、古新聞がまたがさりともせぬ。

⑪四辺を見ながら、うっかり酸漿に歯が触る。⑫とその幽な音にも直ちに応じて、コロコロ。⑬少し心着いて、続けざまに吹いて見れば、透かさずクウクウ、調子を合わせる。

⑭聞き定めて、

「おや、」と云って、一段下流の板敷へ下りると、お源と云う女中が、今しがたここから駈け出して、玄関の来客を取次いだ草履が一ツ。⑮ぞんざいに黒い裏を見せて引くり返っているのを、白い指でちょいと直し、素足に引懸け、がたり腰障子を左へ開けると、十時過ぎの太陽が、向うの井戸端の、柳の上から斜っかけに、遍く射込んで、俎の上に揃えた、菠薐草の根を、紅に照らしたばかり。

⑯多分はそれだろう、口真似をするのは、と当りをつけた御用聞きの酒屋の小僧は、どこにも隠れているのではなかった。

⑰眉を顰めながら、その癖恍惚した、迫らない顔色で、今度は口ずさむと言うよりもわざと試みにククと舌の尖で音を入れる。⑱響に応じて、コロコロと行ったが、こっちは一吹きで控えたのに、先方は発奮んだと見えて、コロコロコロ。

⑲これを聞いて、屈んで、板へ敷く半纏の裙を掻取り、膝に挟んだ下交の褄を内端に、障子腰から肩を乗出すようにして、

つい目の前の、下水の溜りに目を着けた。

⑳もとより、溝板の蓋があるから、ものの形は見えぬけれども、優い連弾はまさしくその中。

㉑笑を含んで、クウクウと吹き鳴らすと、コロコロと拍子を揃えて、近づいただけ音を高く、調子が冴えてカタカタカタ！

「蛙だね。」

と莞爾した、その唇の紅を染めたように、酸漿を指に取って、衣紋を軽く拊ちながら、

「憎らしい、お源や……」

来て御覧、と呼ぼうとして、声が出たのを、圧えて酸漿をまた吸った。

㉒ククと吹く、カタカタ、ククと吹く、カタカタ、蝶々の羽で三味線の胴をうつかと思われつつ、静かに長くる春の日や、お蔦の袖に二三寸。

㉓「おう、」と突込んで長く引いた、遠くから威勢の可い声。

㉔来たのは江戸前の魚屋で。

最初に、さまざまな興味深い特徴が見られる文①から文④までを取り上げて見ていきたい。例１を読むと、自他の関係を文章中から判定する場合、その場面に誰が（何が）登場しているのか、誰が何をしているのか、それは誰の様子なのか、などの各文、各文節、各語彙の所属関係、相互関係の把握が文章理解の重要なポイントになる。しかも、その関係は、一文の中で完結しているわけではない。例１文①は、その文だけでは、「素顔」は誰の素顔なのか、「口紅」はどこに塗られているのか、「色に紛う」は誰の様子か、可愛い音とは何のことか、「唇」は誰の唇か、「唇が鳴る」とはどんな様子かは分からず、文②に「お蔦は、皓歯に酸漿を含んでいる」とあることで初めて、「素顔」は「お蔦」の顔、「口紅」はお蔦の唇に塗られていること、「素顔に口紅で美い」「色に紛う」はお蔦の容姿のこと、「可愛い音は、唇が鳴るのではない」は、お蔦が白くきれいな皓歯に酸漿（ホオズキ、カガチ）を咥えて吹いていることだと分かる。

airiti

文章中に出ている文、語は、その文章中での意味的な相互関係で所属関係や相互関係が明らかになって初めて、容姿を形容したり、情景を述べたり、登場者の動きを描写したりする機能が明らかになる。こうした文章中での表現要素の所属関係、相互関係を規定している条件を「態」と考えることにする。

語彙からみると、文①の各分節では、「～で美い」、「～に紛う」、「～が鳴る」といわゆる形容詞や自動詞が用いられ、文形として「～は～ではない」という判断文の形式を取っている。文②は「～を含む」という他動詞で「～は～ている」という文形をとっている。主たる登場者を描く文と、それに従属する文とは用いられる語彙や文形に差が見られるとも考えられる。

文単位で見ると、文①は文②に従属していると言える。しかし、文①と②を入れ替えてみると、その順序を変えることで、焦点が「音」から「お蔦」に変わってしまうため、入れ替えることは適切とは言えない。酸漿の「音」は確かに「お蔦」が鳴らしているのではあるが、文章中では以降に酸漿の「音」に関する話題が続いていくことから、「お蔦」と同様に焦点化されている登場者とみることができる。「音」＋「は」という形式が使われていることには、その文が、従属関係にあっても焦点化されていることを示していると言えそうである。

文③の場合も「「～」と～婦人連が風説をする」という形で、お蔦と異なる登場者には「～が～をする」という文形で他動詞が用いられている。新しい「婦人連」は「お蔦」と同等の登場者と言える。しかし、「婦人連」がお蔦を批評している「早瀬の細君はちょうど（二十）と見える」「酸漿を鳴らす」「素性も知れたものだ」の各表現は文②との関係で、お蔦のことを言っていることが初めて分かるので、やはり文②に従属していると言える。文形としては「～は～する」も使われると同時に、「～は～見える」という自動詞、「～は～ものだ」という判断文が使われている。

文④は、昨夜の出来事を描いているが、「桜草を買った」「可いの

を撰って」、「間に挟んで帰った」という「酸漿」の説明は、文②があることで、お蔦が酸漿を買ってきた経緯であることが分かり、「隣家の娘――女学生に、一ツ上げましょう、と言って」勧めたにもかかわらず、「そんな野蛮なものは要らないわ！　と刎ねられて、利いた風な、と口惜がった」のも、文②によって、お蔦が今、酸漿を吹いている経緯だったことも分かる。語彙として「～を買う」「～を撰る」「～を挟んで帰る」は他動詞、「～と言う」「～と口惜がる」は自動詞であるが、これらの表現が文③に出ている「婦人連」のことではなく、いずれもお蔦の動きを伝えていると分かるのは文②の「お蔦は～ている」で登場した登場者が、次の文で新たに「～は／が」で提示される登場者がない限り、継続して以降の文でも主な登場者でありつづけているためと考えられる。その中で、態の問題として取り上げられている「受け身」が、「隣家の娘――女学生に～と刎ねられて」と出ているのは注目すべき点と言える。「～を刎ねる」は他動詞なので、「られる」が付かない限りは、お蔦の動きになってしまうと考えられるが、「られる」という「受け身」を使うことで、「～を刎ねる」はその文に出ている別の登場者「隣家の娘――女学生」の動きだったことが分かると言える。さらに、文③の「夫人連が風説をする」と較べて見ると、「夫人連が風説をする」ことにお蔦は直接関与していないが、「隣家の娘――女学生に～と刎ねられて」は、お蔦の勧めに対する「鄰家の娘」の反応で、お蔦が密接に関与している。つまり、文章中では、所属関係、相互関係が異なる主体の「他動詞」には必ず、それが主たる登場者とは違うことを示す、別な登場者を出し、同時に別な文形としての「られる」を用いる必要があると言えるようである。

今まで態を考察してきた先行の諸論は、文章中での表現要素の所属関係、相互関係は捨象し、基本的に単文あるいは文中での表現要素の修飾関係だけを見ていた。例１で使われている顕示的な態を示す「隣家の娘――女学生に～と刎ねられて」は、文章中での文①～文④の各表現要素の所属関係、相互関係がなければまったく理解で

きない表現であり、態は語、文よりもさらに大きな言語表現の単位としての文章中で初めて機能している文法カテゴリーであると見る必要があると言えよう。[10]

文①から④までを見ると、文①③④は文②に従属して初めて表現要素の所属関係、相互関係が理解できる潜在的な表現構造を持っている。その中で、文②の「～は～ている」は、お蔦という登場者を登場させ、読者に文章での表現要素の所属関係、相互関係を理解させる焦点化の特別な機能を果たしており、こうした形で主たる登場者を登場させる小説は近代のひとつの特徴になっている。[11]

文②の主たる登場者お蔦は、以降の文で時の経過に従って、文⑥⑨～⑪、⑬～⑲、⑳㉑の二重線部のように動きを続けていく登場者である。「お蔦は～」という表現を容易に補うことが出来るが、すべてそれは顕在化していない。しかし、文②での焦点化がされているので、以降の動詞文、判断文は基本的にお蔦の動きに所属することになる。こうした主たる登場者の動きに属する表現は能動態と言える。

所属、相互関係が変わる⑦には、以降に連続してその様子が描かれる「声」が人物以外の登場者として出ている。その「声」に属する表現は⑨、⑫、⑬、⑱、⑳、㉑に波線部のようにそれぞれ動詞等の所属主が変わった部分に所属主が示されている。⑦以降ではお蔦の酸漿に対して答える「声」に所属する表現が多く出ており、お蔦の動きと声の様子とがそれぞれの表現の主体、所属が分かるように描かれている。以降でも、文①～④に見られる表現の所属相互関係を示す形式は変わっていないと言える。

---

[10] 日本語学の一部研究者や日本語教育では認められていないが、言語単位として語、文、文章を定義したのは時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店、時枝誠記（1960）『文章研究序説』山田書院に始まる。また、日本語の基本的な文章、文、語に関する表現単位を提起したのは永尾章曹（1975）『国語表現法研究』三弥井書店、永尾章曹（1992）「日本語の文法について」『日本語学』和泉書院等を参照。

[11] 近代小説の文章構成については永尾章曹（1992）「描写と説明について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院参照。

ここから仮定として考えられることは、態を規定する条件は、焦点化された文章中での主体が存在していることであり、文章中の各レベルの表現は、その焦点化された主体に属するか属さないかを示す形式を必ず持つ必要があるということである。態は文章中で焦点化される主体に関して、他の表現要素の所属関係、相互関係を示す形式として、黙示的態と顕示的態を取っていると考えられる。態には、主体への所属を黙示的に示す態の形式として語彙的な区別（自動詞、他動詞等の動詞の種別、動詞文を作る表現要素、判断文を作る表現要素）と文形としての区別（各種文末形での動詞文、判断文）があり、顕示的態として「受け身」（今回は出ていないが「自発」「可能」「尊敬」「使役」あるいはアスペクト形、「する」などの特定の動詞形の形式等）などの文法化された明示的な各形式を持っていると言えるのではないであろうか。

現代日本語の小説に比べると、倒置などが多用され異なる表現形式は目立つが、自他の関係を文章中から判定する場合、その場面に誰が（何が）登場しているのか、誰が何をしているのか、それは誰の様子なのか、などの各文、各文節、各語彙の所属関係、相互関係は、明治時代後期の小説でかなり明確に判定することができる。同時に態は一定のジャンルの表現（今回は小説）の中で所属相互関係を示す形式として独自の表現様式を持っている可能性が高いと言えよう。

3.2 明治 40 年代「門」における自他の描き方と態に関する表現

次に、「門」第一節前半を取り上げて、自他の描き方に関わる文末と文中の表現を見ていきたい。なお、ローマ数字は段落番号（ただし、煩雑になるので会話文は前後の文に続けて段落とした）、丸数字は文番号である。細点線は宗助に属する表現、二重線部は宗助の動きに属する表現、下線部は細君の動きに関わる表現、大点線部は細君に関わる表現、波線はその他に所属する表現である。

例 2「門」

Ⅰ　①宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好さ

そうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。②秋日和と名のつくほどの上天気なので、往来を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。③肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでいる。④その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。⑤たまの日曜にこうして緩くり空を見るだけでもだいぶ違うなと思いながら、眉を寄せて、ぎらぎらする日をしばらく見つめていたが、眩しくなったので、今度はぐるりと寝返りをして障子の方を向いた。⑥障子の中では細君が裁縫をしている。

Ⅱ　⑦「おい、好い天気だな」と話しかけた。⑧細君は、

「ええ」と云ったなりであった。⑨宗助も別に話がしたい訳でもなかったと見えて、それなり黙ってしまった。⑩しばらくすると今度は細君の方から、

「ちっと散歩でもしていらっしゃい」と云った。⑪しかしその時は宗助がただうんと云う生返事を返しただけであった。

Ⅲ　⑫二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寝ている夫の姿を覗いて見た。⑬夫はどう云う了見か両膝を曲げて海老のように窮屈になっている。⑭そうして両手を組み合わして、その中へ黒い頭を突っ込んでいるから、肱に挟まれて顔がちっとも見えない。

Ⅳ　⑮「あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。⑯細君の言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生に共通な一種の調子を持っている。

Ⅴ　⑰宗助は両肱の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、

「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

Ⅵ　⑱それからまた静かになった。⑲外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴った後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。⑳宗助は仕立おろしの紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で貪ぼるほど味いながら、表の音を聴

くともなく聴いていたが、急に思い出したように、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近来の近の字はどう書いたっけね」と尋ねた。㉑細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

「近江のおうの字じゃなくって」と答えた。

Ⅶ　㉒「その近江のおうの字が分らないんだ」

Ⅷ　㉓細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」と云ったぎり、物指の先を、字の留った所へ置いたなり、澄み渡った空を一しきり眺め入った。㉔宗助は細君の顔も見ずに、

「やっぱりそうか」と云ったが、冗談でもなかったと見えて、別に笑もしなかった。㉕細君も近の字はまるで気にならない様子で、

「本当に好い御天気だわね」と半ば独り言のように云いながら、障子を開けたままま裁縫を始めた。㉖すると宗助は肱で挟んだ頭を少し擡げて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

Ⅸ㉗「なぜ」

㉘「なぜって、いくら容易い字でも、こりゃ変だと思って疑ぐり出すと分らなくなる。㉙この間も今日の今の字で大変迷った。㉚紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、何だか違ったような気がする。㉛しまいには見れば見るほど今らしくなくなって来る。㉜――御前そんな事を経験した事はないかい」

㉝「まさか」

㉞「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

㉟「あなたどうかしていらっしゃるのよ」

airiti

㊱「やっぱり神経衰弱のせいかも知れない」

㊲「そうよ」と細君は夫の顔を見た。㊳夫はようやく立ち上った。

「門」は二人の主な登場者があり、それぞれに所属する表現が明確に区別されるように描かれている。主な登場者の一方は文①で登場する「宗助」で、文①、③～⑤、⑦、⑨、⑪、⑬、⑭、⑰、⑳、㉒、㉔、㉖、㉘～㉜、㉞、㊱、㊳の各二重線部のように動きが連続して描かれている。「～を持ち出す」「～をかいて見る」等、他動詞が多く使われているが、「横になる」等の自身の動きを示す自動詞や「～と話しかけた」など発言に関する自動詞も用いられている。もう一方は「細君」で、文⑥で「障子の中では細君が裁縫をしている」と「婦系図」のお蔦でも用いられた「～は／が～ている」という文形で登場者として登場して焦点化され、以降、文⑧、⑩、⑫、⑮、㉑、㉓、㉕、㉗、㉝、㉟、㊲と動きが描かれ、やはり「裁縫をする」「顔を寄せる」などの他動詞が多く使われ、発言に関して「～と云った（なりであった）」のように自動詞も使われている。文⑯ではその声に関する説明が判断文で「細君の言葉は～調子を持っている」となされている。かなり整然と二人の登場者に所属し、相互関係を示す表現が用いられていると言えよう。両者の動きが交代するところでは「～は／が／も／～の方から」の形で動作主が明示されて、それぞれどちらの動きなのか明確に区別されている。「婦系図」と同様に、焦点化された登場者を一定の表現形式で登場させ、その動きを一定の表現形式で描くという構成は同一である。

「門」で注目されるのは、以下のように、「宗助」「細君」のいずれにも属さない表現が多数見られる点である。

例 3

Ⅰ②秋日和と名のつくほどの上天気なので、往来を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。③肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでいる。④その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると、

airiti

非常に広大である。

文②「～響が、～聞えて来る」、③「～空が～澄んでいる」、④「その空が～広大である」は、人物ではない「響」「空」を取り上げてそれを登場させている。その際、文③「肱枕をして軒から上を見上げると」、文④「自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると」のように見ている宗助を同時に登場させて、そこから見えている点を述べているところが注目される。これらは登場者との関係で主体に現前している、主体でもなく、それによって動かされる被動物でもない存在、つまり「中動態」的存在である。

続く、以下の部分も同じ機能を持っていると考えられる。

例 4

Ⅵ　⑱それからまた静かになった。⑲外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴った後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。⑳宗助は仕立おろしの紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で貪ぼるほど味いながら、（以下略）

文⑱「静かになった」は、宗助とお米がいる空間全体を指しており、その空間の中で文⑲「～ベルの音が～鳴った」「～声が聞えた」と言えるが、それを認知しているのは文⑳の宗助である。文⑱、⑲は、認知された音の表象であり、先の例 3 と同じく、登場者との関係で主体に現前している、主体でもなく、それによって動かされる被動物でもない存在、つまり「中動態」的存在である。

そうした点から見ると、以下の例 5、6、7 も登場者との関係で主体に現前している、主体でもなく、それによって動かされる被動物でもない存在、つまり「中動態」的存在を描いていると言える。

例 5

⑨宗助も別に話がしたい訳でもなかったと見えて、それなり黙ってしまった。

例 6

⑭そうして両手を組み合わして、その中へ黒い頭を突っ込んでいるから、肱に挟まれて顔がちっとも見えない。

例 7

Ⅷ　㉓細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」と云ったぎり、物指の先を、字の留った所へ置いたなり、澄み渡った空を一しきり眺め入った。㉔宗助は細君の顔も見ずに、

「やっぱりそうか」と云ったが、冗談でもなかったと見えて、別に笑もしなかった。

例 5 文⑨は「宗助も別に話がしたい訳でもなかったと見えて」と細君から見た宗助の内面を取り上げている。同様に、例 6 文⑭も細君から見た宗助を「肱に挟まれて顔がちっとも見えない」と取り上げ、同じく例 7 文㉓は「細君は～書いて見せて」と宗助から見た細君を取り上げ、文㉔は「冗談でもなかったと見えて」と細君から見た宗助の内面をまた取り上げている。これらは、登場者相互に見えた相手の姿であり、登場者との関係で主体に現前しているが、主体に属しているのはなく、また、それによって動かされる被動物でもない存在、つまり「中動態」的存在としての他者の現前を描いていると言える。

こうした描写は、近代の日本の小説における視点の問題として取り上げられ、非常に多くの議論がなされた問題であるが、誰に何がどのように現前しているかを提示するのが態であるとすると、描写の中には、動く登場者を描く能動態と登場者に現前する世界、対象を描く中動態があり、この二種類の態によって、小説内に登場する存在、現象、動作等はそれぞれどこに帰属するのか明確に定位され、初めて知覚的に有意義な意識の現前を描き出せるようになったと言えそうである。

態についての問題は、テクスト内での登場者と世界との関係を定位する機能のことであり、そのためにそれぞれの文法形式や語形が使われていると仮定することができそうである。

airiti

4. おわりに

紙数も尽きたので、さらに詳細な点は別稿で論じることにしたいが、中動態の観点を導入することで、主体のある文章である近代小説や現代小説は、そのテクストを構成する各表現単位の機能がより明示的に了解し得るようになると考えられる。同時に、それによって演繹的な概念であった文法概念はより帰納的な、あるいは仮説推論（アプダクション）的な概念に再構築しえる可能性が生まれる。

日本語史の中での位置付けは検討の余地が多いが、「～をする」類の他動詞と「～が見える」等の自動詞は、テクストでの実際の用法から見れば動詞の類別ではなく、主体と世界との関係の違いを示しており、「～する／した」類と「～ている／～ていた」類という文型、あるいは動詞型の相違もそこに関係していると考えられる。

日本では國分(2017)の問題提起で、中動態が人文社会系研究の中で、新しい対象把握のカテゴリーとして注目を集め、多様な分野の研究でこの概念が応用されるようになっている。[12]日本語学の文法概念においても、今までの文法範疇を見直す、大きな手掛かりになると思われる。今後も、具体的事例を元に、質的手法によるテクスト分析により、態の概念の再構築を試みたいと考える。

テキスト

泉鏡花（1997)「婦系図」『泉鏡花集成 12』ちくま文庫・筑摩書房

夏目漱石(1988)「門」『夏目漱石全集 6』ちくま文庫・筑摩書房

[12] 一例として、質的研究の視点で、岸政彦、國分功一郎（2017)「討議 それぞれの「小石」:中動態としてのエスノグラフィ(特集エスノグラフィ:質的調査の現在)『現代思想』45-20pp.42-63、雑誌の特集では、水曜社（2018)「特集意志と意志の外にあるもの:中動態・ナッジ・錯覚」『談:speak,talk,and think』111、國分功一郎、上杉隆、島田雅彦、西川伸一、波頭亮、山崎元（2018)「日本構想フォーラム 中動態の哲学:能動と受動の二元論では問題の本質が見えなくなってしまう」『Voice』484pp.158-167、看護学の視点から、國分功一郎（2018)「特集 オープンダイアローグと中動態の世界」『精神看護』22-1pp.5-20、社会学では大澤真幸、國分功一郎（2019)「特別対談 自由・中動態・責任」『群像』74-3pp.143-158 などがある。

airiti

参考文献

大澤真幸、國分功一郎（2019）「特別対談 自由・中動態・責任」『群像』74-3pp.143-158

川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版

岸政彦、國分功一郎（2017）「討議 それぞれの「小石」:中動態としてのエスノグラフィ(特集エスノグラフィ:質的調査の現在)『現代思想』45-20pp.42-63

金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164集

金田一春彦（1957）「時・態・相および法」『日本文法講座1　総論』明治書院

釘貫亮（2008）「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」『第8回国際研究集会報告書「日本語テクストの歴史的軌跡 解釈・再コンテクスト化・布置」』

國分功一郎（2017）『中動態の世界―意思と責任の考古学』医学書院

國分功一郎、上杉隆、島田雅彦、西川伸一、波頭亮、山崎元（2018）「日本構想フォーラム 中動態の哲学:能動と受動の二元論では問題の本質が見えなくなってしまう」『Voice』484pp.158-167

國分功一郎（2018）「特集 オープンダイアローグと中動態の世界」『精神看護』22-1pp.5-20

小杉商一（1979）「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社 pp. 473-488

水曜社（2018）「特集　意志と意志の外にあるもの:中動態・ナッジ・錯覚」『談:speak,talk,and think』111

寺村秀夫（1982）『日本語シンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店

時枝誠記（1960）『文章研究序説』山田書院

永尾章曹（1975）『国語表現法研究』三弥井書店

永尾章曹（1992）「日本語の文法について」『日本語学』和泉書院

永尾章曹（1992）「描写と説明について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院

airiti

仁田義雄編（1991）『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
日本語文法学会(2005)「特集 ヴォイスの射程と本質」『日本語文法』5-2pp.3-56
野田春美（2012）「文法（理論・現代）」「<特集>2010 年・2011 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』8-3 日本語学会
橋本進吉（1931）「助動詞の研究」『助詞・助動詞の研究』岩波書店
原田信一（1974）「中古語受身文についての一考察」『季刊文学・語学』74pp.44-52
エミール・バンヴェニスト（1983）『一般言語学』みすず書房
細江逸記（1928）「我が国語の動詞の相(Voice)を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』。
前田直子（2014）「文法（理論・現代）」「<特集>2012 年・2013 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』10-3 日本語学会
益岡隆志（1987）『命題の文法―日本語文法序説』くろしお出版
益岡隆志（2007）「ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティとその連関」『第九回フランス日本語教育シンポジウム』http://aejf.asso.fr/files/symposium_actes/2007_actes/2007P17Masuoka.pdf
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店
三矢重松（1908）『高等日本文法』明治書院
宮腰幸一（2014）「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造:予備的考察」『論叢:現代語・現代文化』12pp.1-85
モーリス・メルロ＝ポンティ／滝浦静雄・木田元訳（1964）『行動の構造』みすず書房
モーリス・メルロ＝ポンティ／竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房
森田亜紀（2013）『芸術の中動態』萌書房
八亀裕美（2016）「文法（理論・現代）」「特集 2014 年・2015 年における日本語学界の展望」『日本語の研究』12-3
柳田征司（2011）『日本語の歴史 2　意志・無意志』武蔵野書院

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方との関わりから』くろしお出版